

＜現状と課題＞

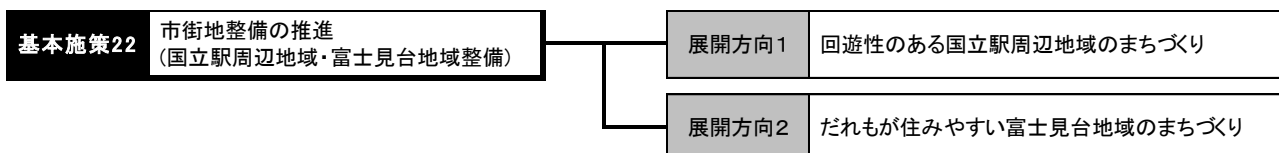
- 1920年代の大正末期から昭和初期にかけて整備が進められた国立駅周辺の市街地(「国立大学町」)は、戦後にほぼ全域が文教地区に指定され、「文教都市くにたち」を象徴する地域となっています。このような特徴を持つ国立駅周辺地域は、平成25(2013)年に、市民の長年の願いであった、中央線連続立体交差事業が完了したことにより、大きく環境が変化しています。それに伴い、国立市がこれまで市民の多大なる参加により議論を積み重ねてきた国立駅周辺のまちづくり計画を実行に移す時を迎えています。
- 国立市では、平成21(2009)年11月に、今後の国立駅周辺のまちづくりを進めていくための基本的な方向性を示した「国立駅周辺まちづくり基本計画」を策定しました。本計画では、「まちと人がつながる、緑と文化のくにたち広場」を目指すべき将来都市像に掲げ、その実現に向け「駅周辺の景観とシンボルをいかしたまちづくり」や「個性的なまちなみをいかした回遊性のあるまちづくり」など5つのまちづくりの目標を設定しています。
- 本計画の計画期間においては、これらの目標に則した国立駅周辺まちづくり事業を着実に実施していくことが求められています。中でも、国立市指定文化財である旧国立駅舎を国立駅前に再築する旧国立駅舎再築事業は、国立駅周辺まちづくり事業の核となる事業です。
- 旧国立駅舎は、「国立大学町」の設計において、大学通りの軸線上、駅前広場を見据えた位置に、まちのランドマークとして機能するよう位置づけられていました。しかし、JR中央線連続立体交差事業の支障物となることから、東日本旅客鉄道(JR東日本)により解体されました。解体された部材は国立市に引き渡され、国立市は、その部材を丁寧に保管し、再築する計画を積み重ねてきました。
- 旧国立駅舎再築事業は、国立大学町のまちづくりの歴史を今に伝え、市への愛着を醸成する貴重な文化財を再築する事業であるとともに、国立駅周辺の景観構造を回復し、まちづくりの駅として、まちの回遊性を高める役割を担うことにつながるものです。そのため、旧国立駅舎を再築し、国立駅周辺をより魅力的な空間にすることが求められています。
- 一方、富士見台地域は、1960年代の昭和30年代後半に、当時の日本住宅公団(現在の独立行政法人都市再生機構(以下、UR都市機構))が、国立富士見台団地の建設とともに進めた土地区画整理事業により基盤整備が進められました。それに伴い、農地が広がっていた土地に、住宅や公共施設の建設が進み、市街地が形成されました。
- 国立富士見台団地は、1965(昭和40)年に完成し、創設から50年が経過しています。創設当時は、UR都市機構のホームページに記されているとおり、「何十倍もの狭き門を経て入居できる、まさに『憧れ』の存在」でしたが、現在は、日本各地にある、多くの団地と同様に、高齢化率の上昇、空室率の上昇等の課題が生じています。
- また、東京都により、矢川駅の近くにある都営矢川北アパートの建て替え事業が進んでいます。居住者の高齢化率は高く、建て替え後の団地で安心して暮らすことができる環境の整備をどのようにするのが問われています。

○これらの課題に対し、どのように対応していくのか、地域住民、UR都市機構、東京都と協働し、まちづくりの方向性を協議していく必要があります。その上で国立市が目指すべき社会構想である「地域包括ケアシステムの構築」に則した、少子高齢社会の進展に対応した、だれもが住みやすい、現在市民が親しんでいる緑豊かな環境を活かした、住空間を創出することが求められています。

○また、基盤整備が進められた経緯から、富士見台地域は、市の中で公共施設が集中している地域です。基本施策 32 で述べられているように、富士見台地域の公共施設もまた老朽化が進んでいます。それら施設の再編計画を、富士見台地域まちづくり事業でも意識し、少子高齢社会の進展に則した施設配置を検討していく必要が生じています。

<施策の目的及び体系>

それぞれの地域の特性に合った都市機能の整備が行われ、利便性や快適性、防災面からみた安全性を兼ね備えた良好な市街地を形成します。



<展開方向1：回遊性のある国立駅周辺地域のまちづくり>

【目的】

文化財である旧国立駅舎を中心とする国立駅周辺地域を、回遊性のある空間とすることにより、国立市の魅力を高めます。

【手段】

- ◆国立駅北口、南口の駅前広場整備、国立駅周辺の道路整備等を進めることにより、だれもが歩いて街を楽しめる回遊性のある空間を創出します。
- ◆市民に必要な機能を有する公共施設整備を進め、それらを中心に「市民が集い、来訪者を迎え、にぎわいと交流のある」空間を創出します。
- ◆文化財である旧国立駅舎を再築し、国立大学町のまちづくりの歴史を今に伝え、市への愛着を醸成するとともに、国立駅周辺の景観構造を回復し、「まちづくりの駅」として、まちの回遊性を高める役割を担う拠点として整備します。

【展開方向の進捗状況を測定するための指標】

指標名	単位	指標の説明又は出典元	実績値	目標値	
				H31年	H35年
国立駅周辺まちづくり事業の進捗率	%	総事業費に対する当該年度までの事業費執行額の割合	44.3 (H27年)	81.4	87.9
旧国立駅舎及びその周辺で活動に参加した人数	人	平成31(2019)年度までは検討に参画した人数、平成32(2020)年度からは実際にイベント等を行った、イベント等に参加した人数	0 (H27年)	750	100,000

<展開方向2：だれもが住みやすい富士見台地域のまちづくり>

【目的】

富士見台地域を、少子高齢社会に対応した、だれもが住みやすい理想的な住空間とし、老いても若くても安心して暮せる地域とすることにより、国立市の魅力を高めます。

【手段】

- ◆地域住民、UR都市機構、東京都と協働して、まちづくりの方向性を協議します。
- ◆富士見台地域における、公共施設の再配置の検討を行います。

【展開方向の進捗状況を測定するための指標】

指標名	単位	指標の説明又は出典元	実績値	目標値	
				H31年	H35年
富士見台地域の居住人口	人	富士見台地域まちづくり事業区域内の人口(各年1月1日現在)	17,166 (H26年)	17,200	17,200